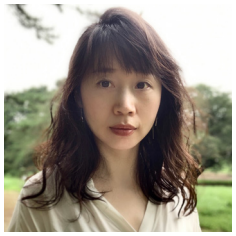
作品1「八月対談録」　作品2「変奏」

映像学科　ジャン ウェン



俳優、「意味をこえる身体へ:ショットムービープログラム」制作代表
2004年北京電影学院在学中、映画「単騎千里を走る」に出演したことで映画俳優デビュー。2007年来日後、映画、舞台などの様々なメディアで「演じる」行為を実践しながら、映画における身体のあり方を研究し続けてきた。2022年東京藝術大学大学院映像研究科博士学位を取得し、映画において俳優の代替不可能で、物語に回収されない「詩的身体」をテーマに扱い、独自の制作法で映画を作りながら、映画演技の研究をし続けている。

「意味をこえる身体へ：ショットムービープログラム」（以下「ショットムービー」）は、2021年から本格的に始動した共同制作プロジェクトである。「ショットムービー」とは「ショット（shot）」と「ムービー（物語）」を組み合わせた造語であり、映像作品における最小単位としての「ショット」と、複数のショットが連なることから生じる物語の緊張関係を問いなおす実践を主な活動の目的としている。

ショットムービーの制作法は、制作側の意図を反映した脚本や物語を事前に作り込んで、俳優がそれらを実現するために動くという階層秩序的なものではない。そうではなく、このプロジェクトの制作法において重視しているのは、役としてではない俳優の個人的な身体性や、制作側と俳優のインタラクションを重ねることで生まれる言葉や状況の変化を脚本に織り込んでいくといった、制作・俳優・技術スタッフたちによる共同性である。今回上映する2つの作品「八月対談録」（2021）と「変奏」（2022）は、どちらも以上のような方法に基づいて制作された。